



前田 哲子さん(権現堂)

取材者：浪江町役場 小島・中川・嶋原
取材日：2月28日

人とお付き合いを大事にして 物づくりを楽しむ日々

浪江町で30年間麻雀荘を経営されていた前田さんは、現在、本宮市の仮設住宅で暮らしています。朝1時間の散歩を日課とし、クラフトのかご作りや手織りのショール作りなど新しいことに取り組まれ、毎日を生きて過ごされています。気さくで明るい人柄に自然と友人も増えていらっしゃるようです。



▲ショールを作っている前田さん

震災当日の夜は浪江中学校、翌日から4日間を津島で過ごし、二本松市の杉田住民センターで1か月の避難生活を送りました。それから2次避難所の猪苗代町沼尻温泉で5か月過ごし、平成23年9月より本宮市の恵向仮設住宅で暮らしています。

震災・原発事故がなければ、今もお店を続けていたであろうなと思います。

ら浪江の人と話ができていいと思ったりか
らです。
ここでは、地元の方にもとても親切にしていたらいいと思います。
住まいに慣れて落ち着き心の余裕ができた頃に、出来ることをやろうと思いつ、本宮市のシルバー人材センターの特例会員になって新しい友人ができました。
また、集会所でクラフトのかご作りを教えていただき、工夫しながら楽しんで作ってイベントがあれば販売しています。少しでも売れると喜びを感じてやる気が起ります。

浪江町は生まれてからずっといた町です。ありふれた生活でしたが、今はそれがいかに大事だったかと思つて、「いずれ浪江に帰ろうね。」と、言っています。果たしてどれくらいの人か帰るのだろうかと思つてもあり、心は揺れています。浪江に戻りたいと思う一方、息子家族や友人が暮らすいわきや、今住んでいる本宮にも馴染んできているので迷います。

朝早くからの1時間の散歩に始まり、ラジオを聞いて楽しんで、用事で出掛けたり、物づくりをしたりとうまく時間を使つての暮らしです。避難生活の中で、以前のお客様との繋がりの有難さを感じたり、新しくできた人の繋がりと新しく始めたことなど楽しい出会いがあつて、外に出て行くことは大事だなあと思います。

浪江の こころ通信

・第34号・

平成23年3月11日に発生した東日本大震災、そして福島第一原子力発電所の事故により、福島県内外に分散避難した浪江町民。長期化する避難生活、先の見えない不安の中で、町民の皆さんがどのような思いで生活し、ふるさとへの思いを抱いているのか。

こうした町民の思いをつなげるために、“浪江のこころプロジェクト”が立ち上げられました。一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアム(※)が中心となり、全国各地のNPO、大学等の皆さんが取材を進め、浪江町との連携のもと「浪江のこころ通信」が編集・発行されます。

浪江のこころプロジェクトは、分散避難している町民の皆さんの声を「浪江のこころ通信」を通してお届けし、ふるさと浪江町がかつての暮らしを取り戻すことへの願いとこたわりを発信・共有しようとするものです。

※一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアムは、東北圏(7県)の地域コミュニティ再生や協働のまちづくりの推進を目的として、大学、NPO、企業、経済団体、行政等が連携したコミュニティ支援ネットワーク。仙台が本拠地。

「浪江のこころ通信」第34号への感想をお寄せください。

【連絡先】〒964-0984 福島県二本松市北トロミ573番地
「浪江のこころ通信」宛
FAX.0243(22)4218



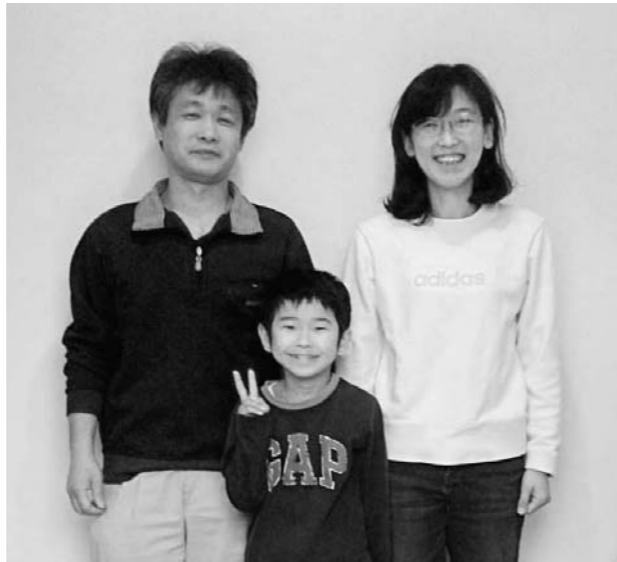


佐々木正信さん・優子さん・大輝くん(請戸)

取材者：コミュニティ・ワークス 青木
取材日：3月1日

みんなで静岡に越してきました！

東日本大震災後、間もなくつくばに避難してきた佐々木さんご家族。慣れ親しんだつくばから今年1月に静岡県に引っ越してきたばかりです。お母さんのキヨ子さんも一緒に新天地での生活が始まりました。フォトビジョンから送られるまちの様子に思いを寄せ、これからの復旧・復興のみちのりを気にかけておられます。



▲4月から4年生になる大輝くんを囲んでニッコリ！

■震災の時、家族はバラバラでした
当時私と息子と母は請戸に住み、妻はつくばにいました。あの日の朝も、私は会社のある槽葉工業団地への通勤途中に、幼稚園に通う息子を夜の森にいる妻の両親に預けました。仕事が終わってから息子を迎えに行きましたが、もう誰もいなくて、どこに避難したのかわかりません。とりあえず息子にはおじいさんとおばあさんがついていてから大丈夫という安心感だけがありました。それから私は浪江に向かいましたが、携帯はつながらず、迂

回しながら槽葉の道の駅に上がった時に津波が見えたので、請戸の家はもう津波で流されたこと確信しました。津波が引いた後、夜道を走り6号線の先から瓦礫の山のため先に進めないことを知り、避難所の浪江町に向かいました。着いて早々玄関先で知り合いに会い、母の無事を聞いたのです。
気がかりは息子でした。翌朝早く夜の森へ迎えに出ましたが、仕事帰りには通れた踏切が通行止めになり、携帯は相変わらずつながらず、さらに津波への避難指示のため迎えには行けなくなりました。その頃息子は、妻の弟夫婦のいる宇都宮に避難していたのですが、その消息もつかめないうまま。つくばにいた妻がやっと宇都宮と携帯がつながり、私も妻と連絡がとれて、息子と会えたのは1週間経つてからでした。小学校へ入学するために揃えていたものが津波で流されましたので、品薄の中からやっとのことでお気に入りブルーのランドセルが見つかり、息子はつくばの小学校に入学しました。

■つくばではいろんな方にとってもよくしてもらいました
つくばでは市役所の方々に随分相談に乗ってもらいました。1年位経つ頃、避難している人たちから「自分たちで情報を発信したい！」と声が上がって、『元気つくば会』として、浪江だと古場さんが中心になって情報を届けてくれました。他には地元のお母さんたちと双葉郡の人たちをつなぐ『ルピナスの会』が子どもと参加できる交流会を開いてくれたりして、妻子が参加したこともありました。



佐藤亜由子さん(川添)

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 古山
取材日：3月6日

アンジーとジャックを真ん中に、大好きな家族がしっかりつながって

震災・原発事故による佐藤さんご家族の避難の日々と、愛犬たちを浪江町で救出し、大切に保護したNPO法人アニマルレフュージ関西(以下、ARK)の活動を通して、愛犬と家族の感動的な再会が綴られた物語『おかえり！アンジー』が3月5日、本になりました(集英社みらい文庫 高橋うらら・著)。

あの未曾有の大災害の際にペットを置いたまま避難せざるを得なかった家族の様子や、ペットに対するきちんとしたレスキュー活動を知って頂きたいと、亜由子さんは今回の取材を希望されました。

福島市飯坂町のご自宅を訪ねると、がっしりした体格の大きなアンジーが迎えてくれました。震災後に飼われた猫のジャックも、私を不思議そうに見ながら「遊ぼうよ」と言わんばかりに、時折可愛いちょっかいを出してくれました。



▲また一緒に暮らせてよかったね。犬のアンジーと、猫のジャックを抱いた亜由子さん



▲「本を通じて、大災害が起こった時に家族の一員であるペットをどう守るのかを考えたり、ペットや飼い主家族を支援してくださるARKのような活動も知るきっかけにもして欲しいですね。」

■「心が決まるまで、犬たちはお預かりしますよ」
ARKの言葉に、勇気を貰って3・11当日は自宅にいました。が、断水以外、被害はさほど酷くはありませんでした。翌12日に有線放送で避難指示が出された時も「大したことはないだろう。念のための避難だろうから、すぐ帰れるよ」と、犬のアンジー、クラリス、シンバは自宅に置いたまま、ケージに入れた猫のジタンと財布、携帯電話だけを持って、車で国道144号を通り津島へ向かい、体育館に3日間、寝泊まりしました。
15日に起きた4号機の事故から再び避難するために、二本松市に向けて山を下ると、携帯電話がつながらず、安否を問うメールがたくさん入っていて、福島市飯坂町に住むいとこと連絡を取り合い、頼ることにしました。
4月末に同じ飯坂町内のアパートに移り、長女は地元の中学校に、長男は5月の連休明けから安達のサテライト高に通うことになりました。夫は浪江に戻るたびに犬たちの安否を確かめ、出来るだけの世話をしていました。
6月12日に夫が帰宅し、ARKが残してくれた貼紙紙から、犬たちは無事に保護され、遥か大阪府能勢町で暮らしていることが分かりました。私もARKと連絡を取って犬たちの安否を確認し、そのご支援の確かさを

心の支えに、犬たちの今後について何度も家族で話し合いました。オーストラリアン・シェパードのアンジーは珍しい犬種の上に、飼い方が難しい犬でしたので引き取る決心をし、比較的飼い易い他の2頭、クラリスとシンバには関西の里親を探して頂きました。そうなるも大型犬と一緒に住める家が必要です。ようやく2013年7月に家が完成し、7月27日に福島空港に迎えに行きました。大震災の日から約2年半が経っていました。アンジーは私たちをちゃんと覚えていて、この家に帰ってきてからは私たちの傍を離れようとしませんでした。
■もう離れ離れになることは決してありません
アンジーは原発事故の影響で被曝しているかもしれないし、大型犬の寿命は14、5年と言われていて、でも仲良し家族の一員として共に過ごして、看取ってやりたいと思っています。私たち夫婦が頑張っている家を見て、アンジーが来たのも、アンジーがいたからこそでした。
私たちは「本当に大丈夫」と言われるまで浪江町には戻らないと思いましたが、私にとつては家族4人とアンジー、ジャックがいるところが、ふるさとです。仕事があつて、出来ることもあります。私たちは、今とても幸せです。



朝田 英謙さん(権現堂)

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 古山
取材日：3月6日

故郷再生は、我々青年の使命です

朝田英謙さんの妻、麻美さんは震災当年の「浪江のこころ通信 第4号(広報なみえ2011年10月号)」に登場され、震災当時や新潟に避難された頃の様子を伝えてくださいました。その取材から2年半後、今度は夫、英謙さんにその後のお暮らしや、今、力を注いでいる地域活動のお話しなどをお伺いしました。



▲福島市のご自宅にて

父も長兄も浪江町で朝田グループの仕事再開のため、私も通うのに便利な福島市に移り、自宅を臨時事務所としています。私たちが営む冠婚葬祭場は現在、除染作業の現場事務所としてJ.Vにお貸ししているため、保守管理などのために福島と浪江をしょっちゅう往復しています。昨年、祖父が亡くなった時には私どもの会社で葬式を執り行うことが出来ず、母はとても悔しがっていました。私も一日も早い業務再開を願っています。

■故郷浪江への思いと、子どもたちの成長を祈る「鯉のぼりプロジェクト」
今年もまもなく開催です
浪江町は帰宅困難地域と居住

制限区域、避難指示解除準備区域の3つに分かれてしまい、事業や地域運動が自由に展開できないことを大変もどかしく思っています。今年1月、私は一般社団法人浪江青年会議所(以下、JCI浪江)の理事長になりました。JCI浪江のスローガンにもあるように、これからまさに「原点回帰」を目指さなくてはなりません。この災害を乗り越えて再び立ち上げるために、双葉地域や故郷・浪江の再生への取り組みは、我々青年の使命であり、仕事だと思っております。そういった運動の一つの発信として、昨年からはじめた「ふくしま鯉のぼりプロジェクト」を今年も開催します。復興への祈りと共に、家族の結束や思い遣る心、そして子どもたちの健康と健全な成長を鯉のぼりに託したいと願っています。ですから、一人でも多くの人たちにこの取り組みをお知らせし、ご理解と賛同を頂きたいと思っています。



▲昨年の鯉のぼりプロジェクトのひとコマ(二本松市浪江小学校)

浪江の設立記念日に合わせて35周年式典も行われます。どうぞ、皐月の空に泳ぐ鯉のぼりを見ながら、故郷やそこに遊ぶ子どもたちの歓声や笑顔を想い出してください。

※1 2013年4月、福島大学災害復興研究所やふくしま復興塾、伊達市市議会、JCI浪江等が呼びかけ人となり、全国に福島への応援メッセージと共に鯉のぼりを送って貰うプロジェクト。

※2 浪江町役場、浪江中学校、浪江東中学校、浪江小学校、幾世橋小学校、荏野小学校、大堀小学校



竹田 一興さん・清子さん(権現堂)

取材者：コミュニティ・ワークス 青木
取材日：3月6日

ふるさと浪江を思いつつ

横浜に避難で帰ってきたのは30年ぶりとのこと。前にいた時からの顔なじみで同年代のご近所の方々がいて、日々の暮らしを楽しく元気に過ごされている竹田さんご夫妻。近くに住むお子さんとも連絡をとりあい、お孫さんの健やかな成長を楽しみにしておられます。



▲清子さんが作られた木目込み人形と一緒に

■浪江と横浜の自然に癒されて
家内と一緒に横浜へ来たのは、震災後6、7日目。この家は母が住んでいて、私もここにいて結婚して10年間暮らしていました。子どもたちは幼稚園と小学校低学年まで、その後私の転勤で浪江に移って高校までいて、こちらの大学を卒業し、就職したり嫁にいたり。浪江の家は、子どもたちにとって田舎に帰るようで楽しみにしていたようです。「浪江に行きたい！」って今も言います。

■浪江と横浜の自然に癒されて
昨年の一時期帰宅の時、庭の芝生は枯れていましたが、ドウダツツジの紅葉の赤とリンドウのなんとも言えない青色が、一面に敷き詰められとっても綺麗でした。すごく癒され、救われましたね。でもこれから除染で芝生や庭の土も全部掘り返されてしまうと思うと、残念です。普段は週に4、5日朝走って、それからひと汗流してごはんを食べるのが日課。年間10本位、好きな市民マラソンに出ています。浪江にいる頃も地元のコスモスマラソンに出て、何回も走りました。10年以上前かな、10キロの部の50歳以上で3位になりました。今までに走ったコースで印象的なのは、三春の滝桜とダムのコースかな。樹木が立派なので何か力をもらえる。あそこはもう一回出てみたい。

■顔なじみのみなさんに会うと元気になるよ、清子さん
ここに避難して1年半位は、体調がすごく悪くて一人で歩けなかったの。もともと大病をして外出に不安がありました。ただ本調子とはいかないけれども、昨年位から大分良くなり買い物にも一人で行けるようになりました。

浪江で懇意にしていた人形教室のお仲間が、東京や埼玉に4、5人いらつしやることになりました。今では2カ月に一度位、東京で会うのが楽しみです。やっぱりみなさんに会うと元気になりますね。

その人形教室の先生が山形の鶴岡に避難されたのでみんなで会いに行きました。鶴岡はいいところですね、私の第二のふるさとになりました。浪江もふるさとだったんですけれど、羽黒山や庄内平野の景観とか、遠くに墨絵の山が四方に広がっているのが、元気でいるのかと、たまに気がなります。この通信なんか見ると載ってないかな？と思つて見たりして、だからこそ私も元気でいなきゃならないかなと。走れることは健康のパロメーターみたいなものですね。